

(前編の続き)

2021/2/17-2

(うと Q 世話し 「多様性」 後編)

「それでは、ジェンダー以外の事で、お前の考える「多様性」は何か？」
と訊かれれば、尤も身近な処では
「語学（教育）に関わる事」

でしょう。

「最近、我が国の国語が乱れている。実に嘆かわしい事だ」

という話を耳にする度に、之また

「又、言ってらあ」

とってしまうのです。

無論、新聞記事や学会論文、外交文書、学科教科書、受験学習時は正しくあるべきでしょう。

しかし、会話においては「現場を優先する」必要性を感じております。

現場優先を別の言葉で言えば「コミュニケーション優先」と言い換える事が出来ます。

ここでは、言葉は「文法や慣習上正しく使われる対象」ではなく、コミュニケーションを円滑且つより親密で実のあるものにする為の道具」として使うという考え方の方が、よりの確だと思っております。

英語を引合に出せば、世界公用語である英語について、今までの経験からは、英語が母国語である外国人や、母国語ではないがよく使う国々の人たちから「最近、英語が乱れている」という話を聞いた事が一度もないのです。

カナダの英語圏地域の友達によれば

「英語はその国の数だけある。余り気にするな」

といますし、文構成順が、我が国と同じ S,O,C,V (英文法上は S,V,O,C が正しい) の国の人達は英語を S,O,C,V にこちらが並び替えて使っても、違和感なく聞き入れてくれますし、アジア系のある国の人達は「行く」の過去形「went」を使って話すと何の事か解らず改めて文法的には明らかに間違いである「Yesterday I go to restaurant」と言わないと解らない事すらあるのです。彼らは同じ「go」という言葉だけを覚え、それを状況に合わせて「will go」だったり「go」だったり「went」に置換えて使っているのです。

こんな場合、正しい英語は何の役にも立たないばかりか、事項未伝達で言った人間の自己満足でしかない場合もある事を知っておく必要があります。

正しい英語が話せれば世界各国何処でも OK ではないのです。

当店では更に「うと Q 語」といえる言葉でないと通じない時もあるのです。

ここで話は一転。

先の文理、男女クロスオーバーとこの言語、コミュニケーションクロスオーバー。

それらをひっくるめて全体を多様性 (ダイバーシティー) というなら、その獲得の元は、それらが混在している、将に「義務教育期間」と「学習方法 (場面)」の中にあって

然るべきなのではないか？

と最近強く思っております。

文理や男女の多様性も話題としては結構なのですが、その前に基幹部分である義務教育時の語学、コミュニケーション法こそ

「まず多様であって然るべき」

だと自分は考えております。

「世界では、何処でも正しい文法で喋らないと全く通じない」

というのは、完全な誤解はおろか誤謬ですらある気がします。

「ミスリードの極地」

(皆さんが一人残らず外交官志望なら話は別ですが)

以上、多様性を四語熟語にすると

自分は「臨機応変」

相手は「不寛容自戒＝許容優先」

かと。